都市領域としての渋谷-青山
Shibuya-Aoyama as Urban Territory

Jun 15th 2019 @青山学院大学公開講座

伊藤毅
Takeshi ITO

2019年度前期　青山学院大学公開講座

渋谷-青山の都市領域を考える－過去・現在・未来

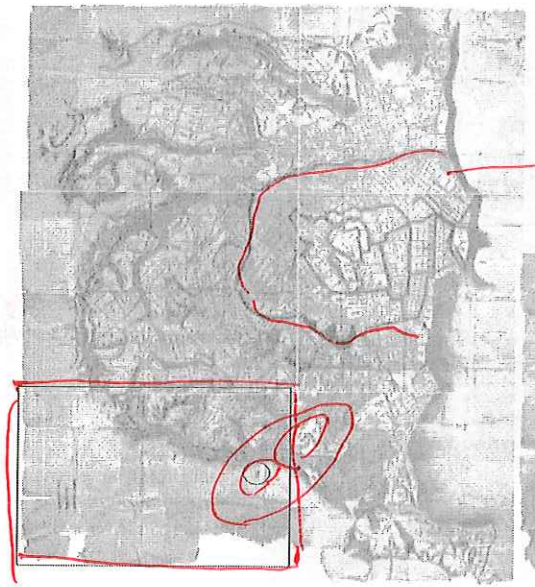
郊外住宅地へのターミナル駅として昭和以降発展した渋谷は、東京オリンピックを経て青山と強い軸によって結ばれ、青山・原宿から誕生した洗練された都市文化はいまや連続的に渋谷の都市文化とひとつながりの都市領域を形成しつつあるかのように見える。本講座では渋谷-青山の都市や建築の歴史をひもときながら、この地の現在・未来を見通す手がかりを得たい。

第1回(6/15)	都市領域としての渋谷-青山	伊藤毅（総合文化政策学部）
第2回(6/22)	渋谷-青山の近代都市史	高嶋修一（経済学部）
第3回(6/29)	近代都市生活の比較史－日本とドイツ	永山のどか（経済学部）
第4回(7/06)	渋谷-青山の都市文化	黒石いずみ（総合文化政策学部）
第5回(7/13)	広域渋谷圏と駅・電鉄	平江良成（東京急行電鉄）

2018～2020年度青山学院大学総合研究所研究ユニット
渋谷-青山を中心とする新都市領域研究拠点構築にむけての総合的研究A General Study for Establishing a New Urban and Territorial Research Center Based on Shibuya-Aoyama Area in Tokyo　伊藤毅（Takeshi ITO）・高嶋修一(Shuichi TAKASHIMA)・黒石いずみ(Izumi KUROISHI)・永山のどか(Nodoka NAGAYAMA)・井上孝(Takashi INOUE)・小島見和(Miwa KOJIMA)

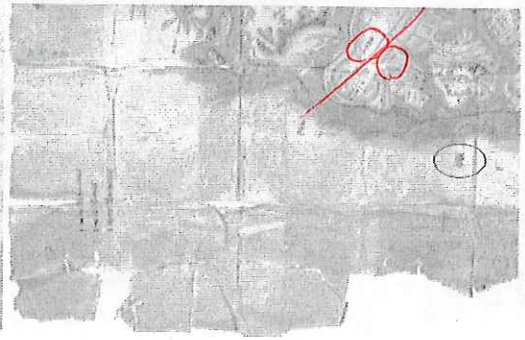
本研究は、渋谷および青山を緩やかに連続しつつ今まさに形成途上にある一体的な都市領域（以下、「渋谷-青山領域」と呼ぶ）と捉え、その空間的・機能的・経済的・文化的な構造を歴史的な観点から明らかにするとともに、多分野の専門家および当該地域で重要な役割を果たしつつある民間企業（具体的には東京急行電鉄、以下「東急」と略）との緊密な研究連携体制のなかで今後の望ましい領域形成の方向性を展望することを目的とする。当面の目標は青山学院大学に従来存在しなかった新たな渋谷-青山都市領域研究の総合的な拠点を形成し、将来の領域形成に大学が一定の貢献を果たすための橋頭堡を築くことにあるが、将来的には都市ガバナンスの当該地域における官・民・学の知の拠点構築を目指す。

渋谷-青山領域は1964年の東京オリンピックを契機に大きく変貌し、江戸・近代東京を継承する日本橋・銀座などとは異なる魅力と洗練された都市文化を育むトポスとして成熟を遂げた。2020年の東京オリンピックは当該地域がふたたび新たな地平へ躍進するための大きな都市的展開が期待できるチャンスである。本研究は一大イベントを間近に控えた青山学院大学を含む渋谷-青山の未来を占う重要課題に、大学として総力を挙げて取り組むべき本格的研究プロジェクトとして位置づけられる。



「寛永江戸全図」（臼杵図書館蔵）：初期江戸の全貌
Old Map of Edo Castle Town in the beginning of 17th Century

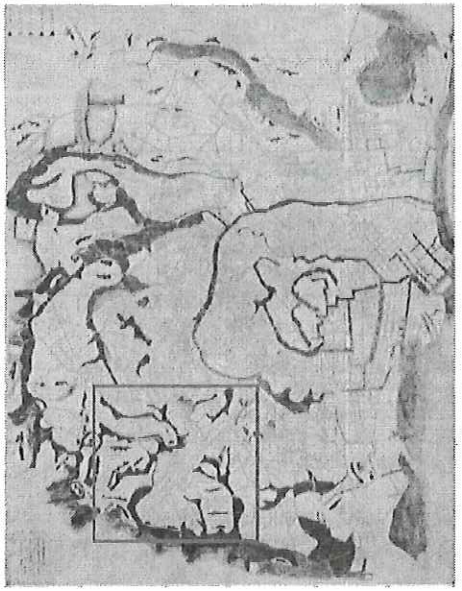
今まで見ていたこの地図



渋谷村　Shibuya Mura Village

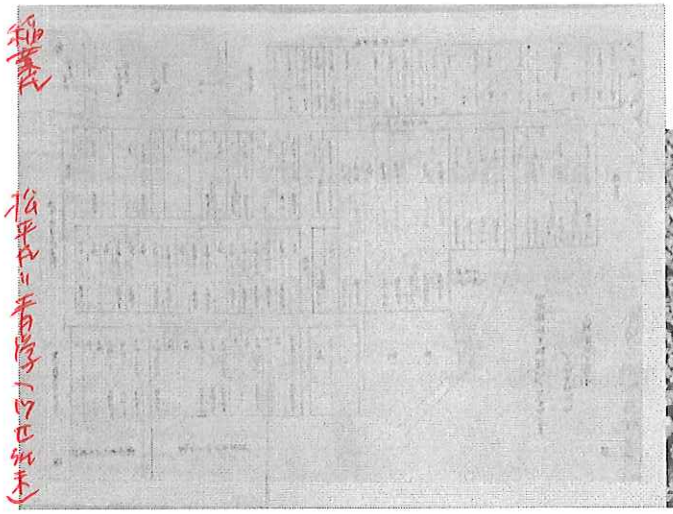
秀忠、高ガリ
伊達、徒頭
毛利久三郎

◎：ダウンロード可



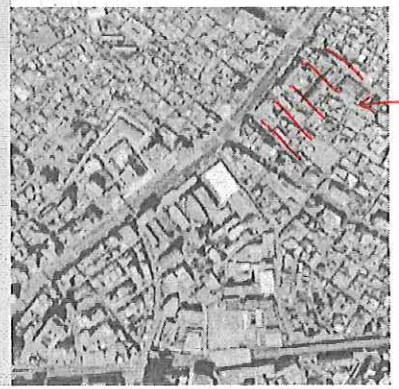
「正保年中江戸絵図」（国立公文書館蔵）：~~18~~17世紀初期江戸 ◎

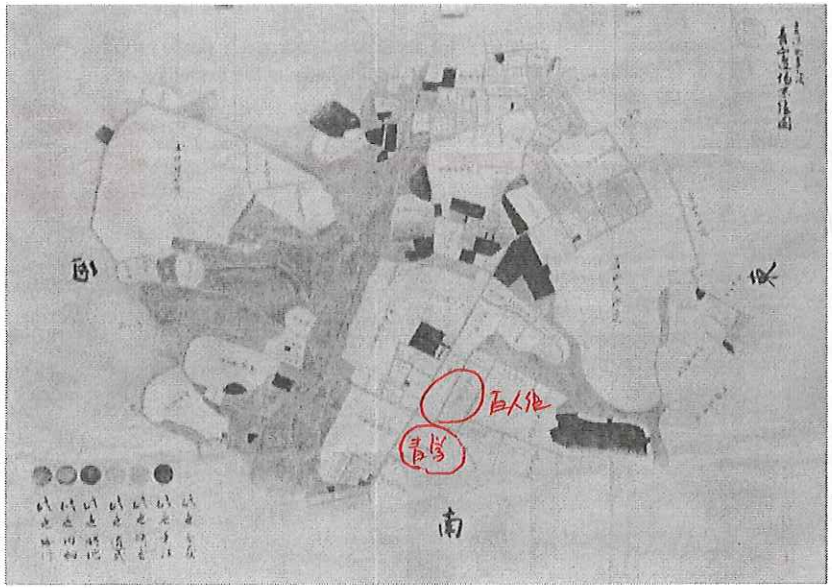
青山百人組屋敷図（国立国会図書館蔵）◎



大名：土地 拝領
相対替（＝土地交換）

現在の青学周辺（google map）

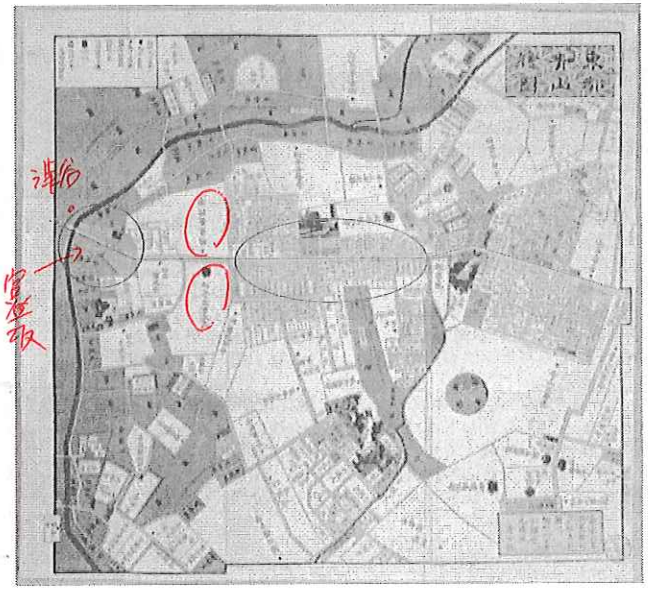




「寛保延享頃青山辺場末絵図」における青山周辺
Aoyama in the Map in the mid of 18th Century

大山街道沿いの町場（道玄坂・宮益坂）、大規模な下屋敷、幕臣屋敷（百人組）
Oyama High Way and Linear merchant place and Samurai residence.

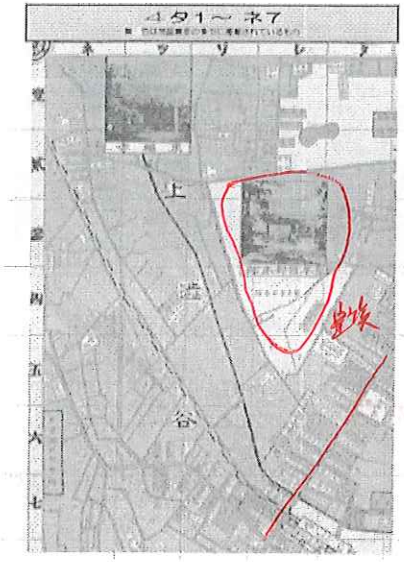
郊外における高度な線的都市集積
High Density of Linear Urbanism in the Suburban Area of Edo

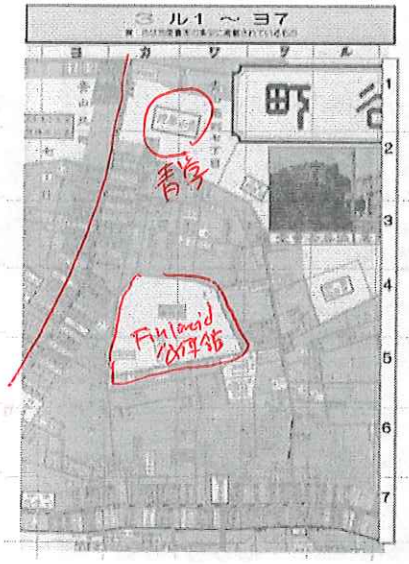


「江戸切絵図」における東都青山絵図
Aoyama in Edo Separated Map in the mid of 19th Century

大山街道沿いの町場（道玄坂・宮益坂）、大規模な下屋敷、幕臣屋敷
Oyama High Way and Linear merchant place and Samurai residence.

郊外における高度な線的都市集積
High Density of Linear Urbanism in the Suburban Area of Edo





『渋谷町商工地図 大正一四年』地図

渋谷略史　Shibuya Chronicle

・明治17年（1884）品川－赤羽間の品川線着工 Shibuya Station
渋谷駅の場所　下渋谷→中渋谷

・教育機関の設置　青山学院（1883年東京英和学校）、國學院大學（1923年現地に移転）、実践女子大学（1903年現地に移転）Educational Institution

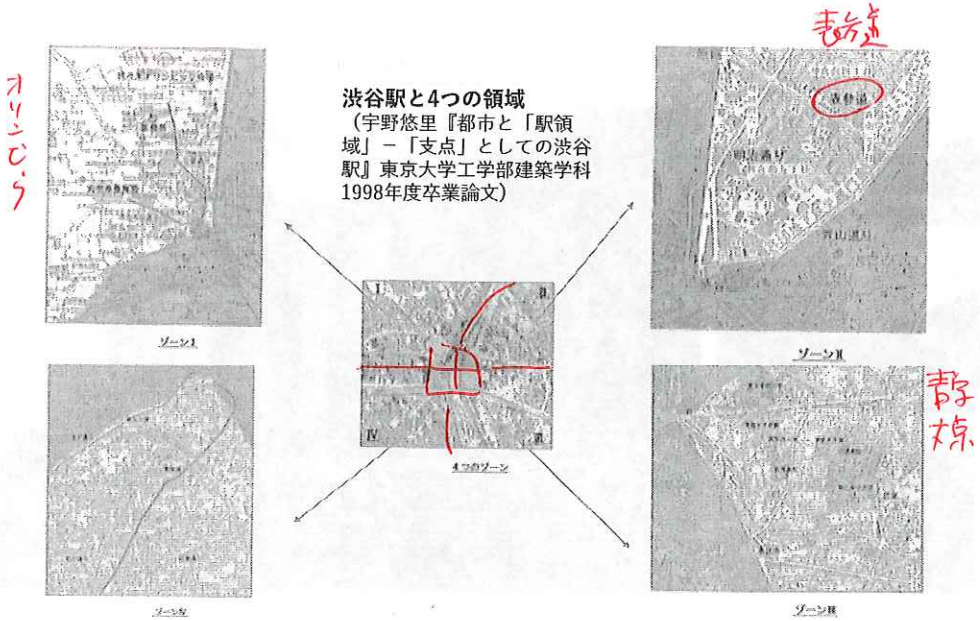
・軍事施設の集中　青山練兵場（1889年）　世田谷練兵場（1907年）、代々木練兵場（1907年）→軍用道路としての大山街道 Army Institution

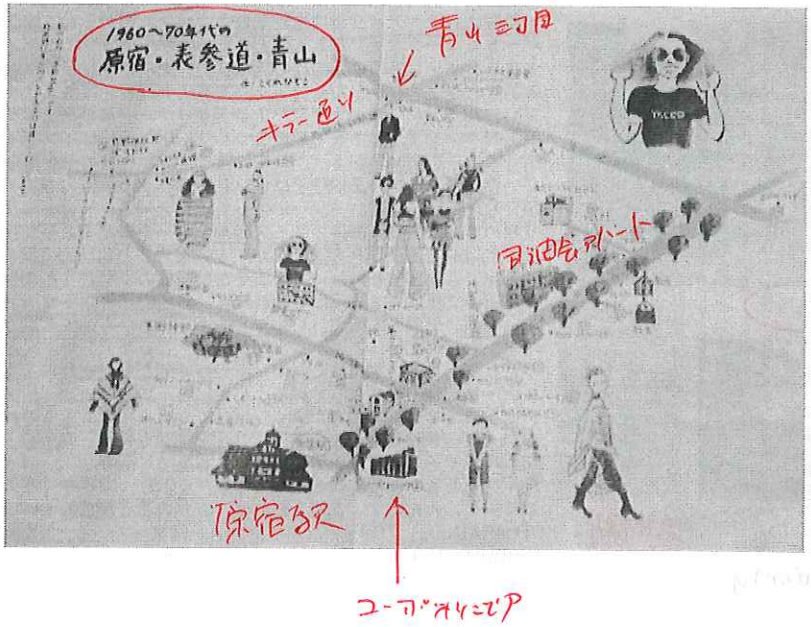
・玉川電車（1907年）Tamagawa Densha Line
市電（1911年）Metropolitan Line
山手線の高架・複々線化と渋谷駅の移転（1920年）Moving Shibuya Station

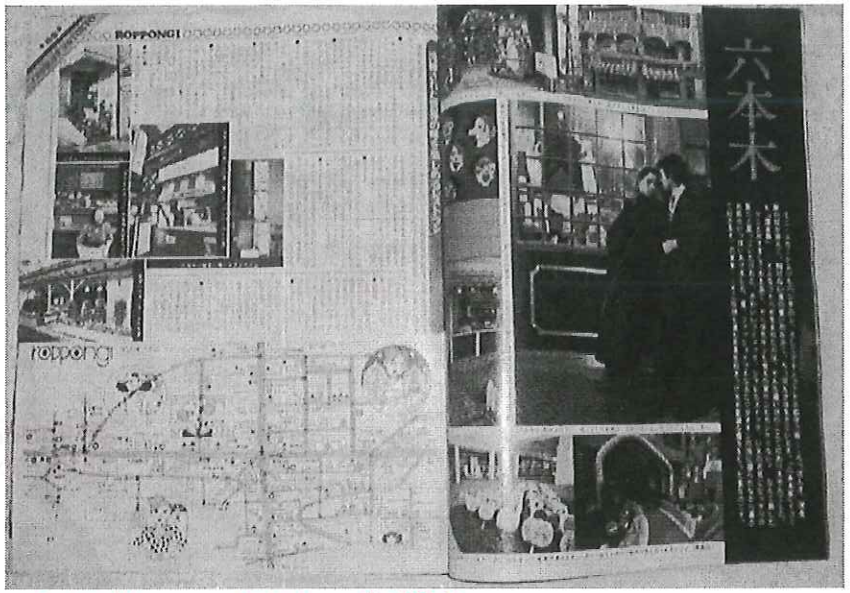
・関東大震災（1923年）Kanto Great Earthquake
バスターミナル化開始　Bus Transportation Center
・東横線（1927年）郊外住宅地との連携　駅正面の変化（北向きから西向きへ：ハチ公前の成立）Tokokosen Line, Suburbia, Hachiko-mae Plaza

・井の頭線（1934年）Inogashira Line

郊外住宅地化
田園、成城 etc.

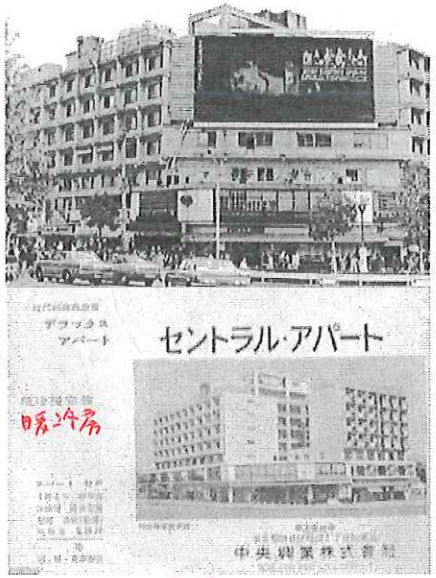






~60年代末～　クリエーター・夜の街へ

ワシントンハイツと原宿セントラルアパート（1958年）



外人向け高級アパート

↓↑喫茶室レオン

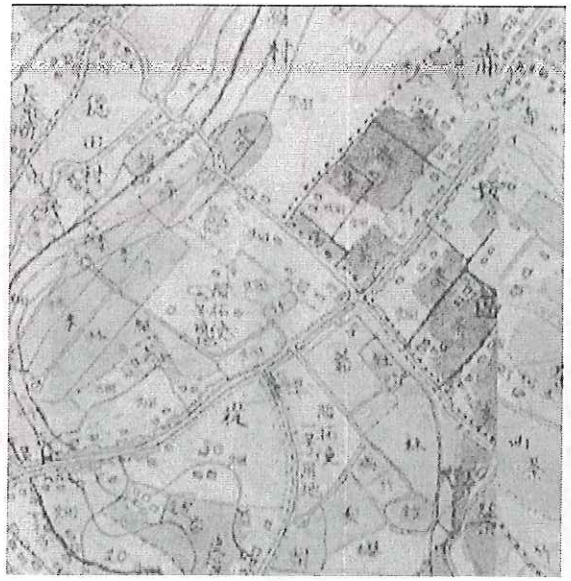
浅井慎平

コーヒーおかわり可

≪原宿は戦後、アメリカの進駐軍の宿舎がある街だった。同潤会アパートもコープオリンピアも外人のためのマンション。キディランドもコロンバンも外国の人向けの店だった。東京オリンピック以前には外国人しか住めなかったセントラルアパート（現・東急プラザ表参道）に70年代になるとカメラマンやデザイナーが事務所を構え、菊池武夫がマンションの１室で洋服をつくり、川久保玲はインディーズのデザイナーを集めたショップの床に座って、手作りの服を自ら販売していた。鋤田正義と高橋靖子はロンドンやパリの最新のカルチャーを紹介し、高橋吾郎はハーレーに乗ってインディアン・ジュエリーを作り始めた。原宿は、海外のユースカルチャーの出島のような存在になっていった。70年代の原宿カルチャーを今まで包括的に捉えられることができなかったのは、「ゆるやかな個性のつながり」が生んだ新しい街の文化はマスの尺度では計れず、日本最初のストリートカルチャーは、伝説の喫茶店「レオン」のように外からは見えにくかったからかもしれない。この小さな写真集は、「レオン」で友人と夢を語り合っていた若い写真家たちが、自分の仲間たちや街並みを撮影したスナップだけで構成されている。そこに写っているのは、原宿カルチャーのオリジン。目力が強く、今見てもクールな「若者の神々」たちだ。70年代に世界に独自の原宿文化を発信し始め、海外の人がユースカルチャーの聖地・原宿にやってくるまでに40年以上。「クリエイティブな若者の聖地」に今も残るスピリットは、写真を見る人の心にも共鳴して火を灯す。この１冊には、世界の若者が求めている「HARAJUKU」のピュアなエッセンスが詰まっている。≫（『70's HARAJUKU』）

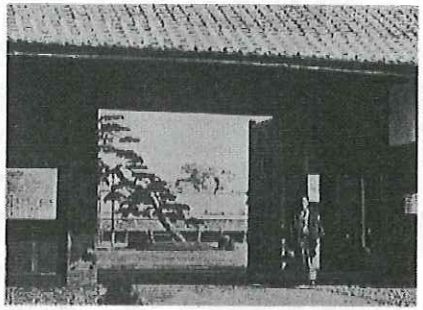
コープオリンピア（1965年）

円下健三も。



明治初期の青山周辺（明治初年「関東迅速測図」歴史的農業環境閲覧システムより）

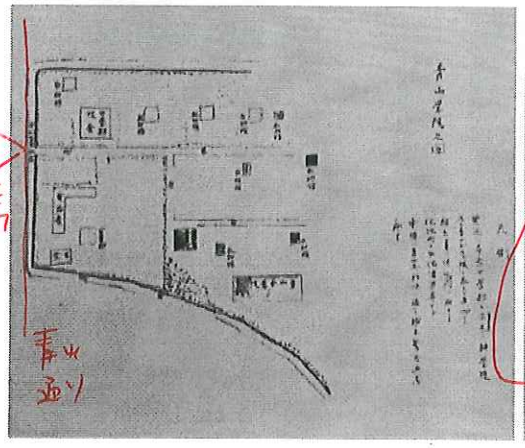
明治政府による開拓使第一官園、第二官園の設置（明治4年）
リンゴ・スモモ・桃・梨・桜・ブドウの栽培（アメリカ・清から輸入）



第一官園（北海道大学附属図書館蔵）

★ 官園→農業試験場（明治8年）→廃止（明治14年）→武蔵府中宿脇本陣田中三四郎（柏屋）へ払い下げ→東京英和学校（明治16年）→青山学院（明治27年）へ

★「青山学院之図」（東京都公文書館所蔵、明治32年＜1899＞）
宣教師館と寄宿舎

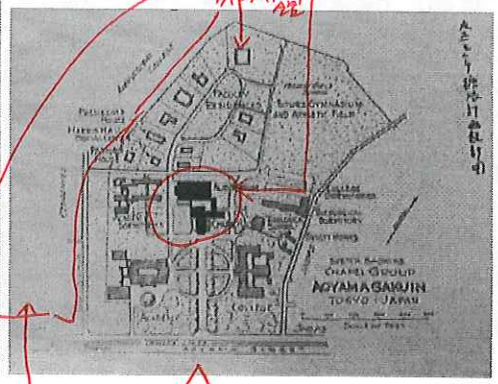


青山通り

正門

青山学院拡張計画（間島記念館蔵、大正7年＜1919＞）

都市とキャンパス



正門

日本初のスーパーマーケット青山紀ノ国屋の誕生（1953年）
（平松由美『青山紀ノ国屋物語』駸々堂、1989年）

★ **紀ノ国屋の歴史**

青山で果物商として創業

1910

1953

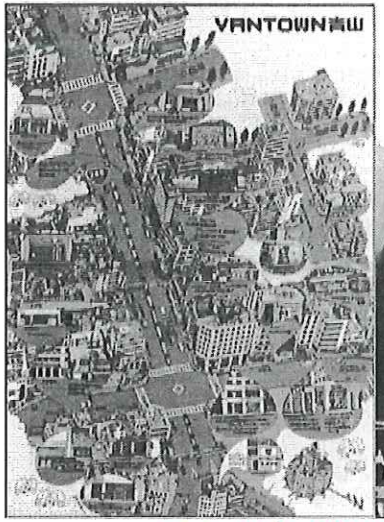
レジで精算、新しい買い物スタイルを導入

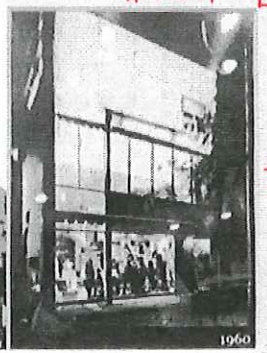
便利でおしゃれなクラフト紙製バッグを提供

1963　駐車場完備

昭和38年(1963)12月の歳末セール。駐車場の完備したスーパーマーケットは珍しかった

★ 石津謙介とVAN（1964年）　VANTOWN青山





VANが次々と街をかえていく　土地を買わず借りていた

天津 岡山倉敷 良子祥介

渋谷 青山 表参道 高 低

泌辺陽 立石住地

テイジン・メンズショップ銀座（宮脇檀設計）

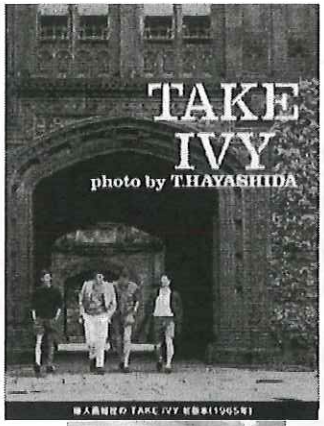
東京芸大卒

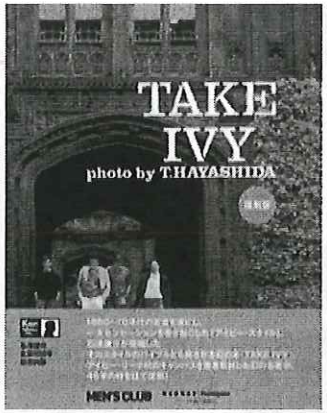
デザインサーベイ

設計の行きづまり 伝統集落を全国まわった

素晴らしい図面が残る

IVYルック





TAKE IVYの復刊本

昭和40年（1940年）、石津謙介をリーダーとする総勢8名のスタッフが、羽田からアメリカ東海岸へ飛び立った。目的は本場アメリカのアイビー校で、本物のアイビーリーガースを撮影した映画と本とを作ること。親しい仲間Men's Clubでくろすとしゆきの「所のアイビーリーガース」連載が始まっており、これの本物版、アメリカ編を視ってこようというのが、きっかけだった。

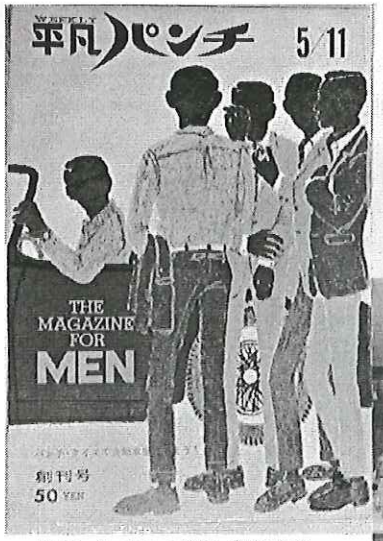
スタッフは、映画版の監督にフルボンヌ大学で映画作りを学んで帰国した小沢昭（俳優 小沢栄太郎の長男）、師本家山本寒三、カメラマン 小林秀昭と助手、スチールカメラマン 林田昭慶、そしてVANからリーダーとして石津謙介、くろすとしゆき、長谷川元が選ばれた。当時は1ドル360円の時代。また外貨も制限されていたため、謙介は日本円で500万円を持ち出し、総予算としていた。ニューヨークを拠点にした撮影チームは、トンタカーのバンに機材を詰め込みコロンビア大学、ブリンストン、ハーバード、イェール、そして最も北ニューハンプシャー州ハノーバーに位置するダートマス大学まで、約2週間駆け足で撮影を行った。1965年はケネディ大統領暗殺の2年後。アイビースタールのキャンパスにはまだベトナム戦争の暗い影は感じられず、のんびりしたキャンパスの様子が残し出されている。

林田昭慶の撮影したスチールは、婦人画報社からハードカバー単行本「TAKE IVY」（著者：石津謙介、くろすとしゆき、長谷川元　写真撮影：林田昭慶）として出版された。いまでこそIVY、TRADファンの永遠のバイブルといわれているが、当初はまほどの人気はなく、発行部数千部の半分はVANが買い取り、得意先に配布したという程度のものだった。

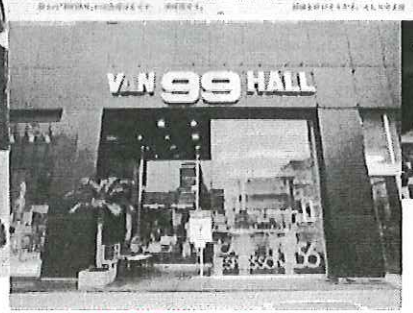
ところがその後数十年の間に、この本は海外のファッション専門家の間でカルト的な人気を博すようになり、オリジナルの日本語版はeBayのオークションにおいて数千ドルで売買されるまでになる。日本でもその人気は高まり、2006年にはSHIPSの協力で限定復刻版が1000部発行されたが、またたく間に完売したという。

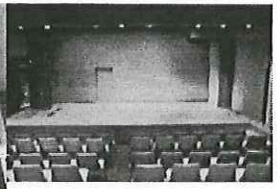
そして2010年、遂に本場アメリカの出版社powerHouse Booksが、アシェット婦人画報社に提携し、この「TAKE IVY」英語版を発売することになった。ニューヨークタイムズ紙は2009年6月17日付の記事で、この本を"a treasure of fashion insiders"「ファッション関係者の宝」と呼び、この本のコピーが複数のデザインスタジオで回覧され、男の新たな資質を生み出すのに役立っていた。数多くの男性ファッション・デザイナーに大きな影響を与えたと記述している。

青山356（3階-56番地）



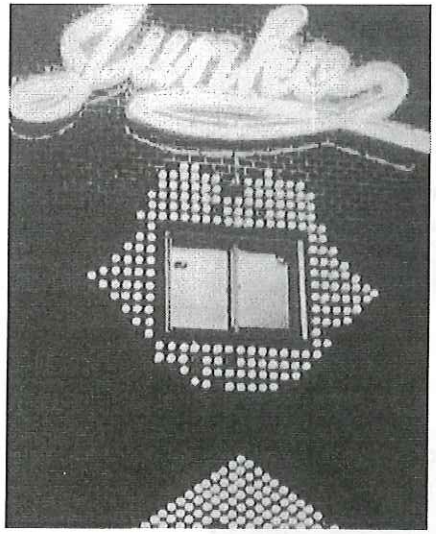
『平凡パンチ』の創刊（1964年）





VAN99ホールの誕生（1973年）

99席 99円のホール ← デザイナーが集まる
コシノジュンコ
ヒャクイッテー セイ。



コシノジュンコのブティック「コレット」（1966年）外苑西通り→通称「キラー通り」

「石津さんのオカゲ」

ハナエモリビル（現存せず、丹下健三設計1984年）

ISSEY MIYAKE（1993年）

ヴィアパスストップ（ミリグラムスタジオ）、ラベルラ（ロベルト・バチョッキ）、プラダ（ヘルツォーク＆ド・ムーロン）

ファッショナブル・タウン・アオヤマ みゆき通り

ミュウミュウ（ヘルツォーク＆ド・ムーロン）

ステラ・マッカートニー（竹中工務店）

コム・デ・ギャルソン（川久保玲）

フロム・ファースト・ビル（浜野安宏・山下和正、1975年）

都市の中に郊外と農的色を。

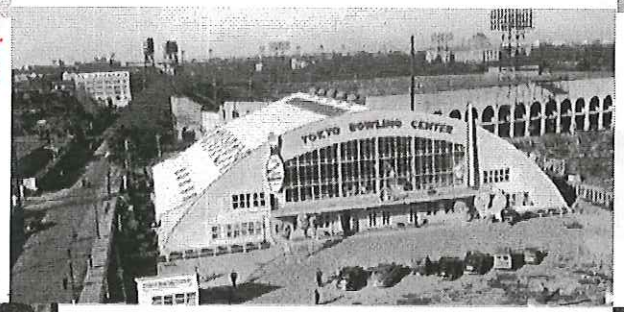
ヨックモック青山店（現代計画研究所、1978年）

先駆的

もう一度ブーム

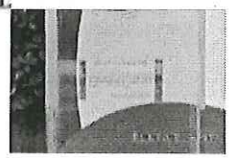
サガシュオ・ウエスタン
Let's go bowling

東京ボウリングセンターの誕生
（1952年）@明治神宮外苑

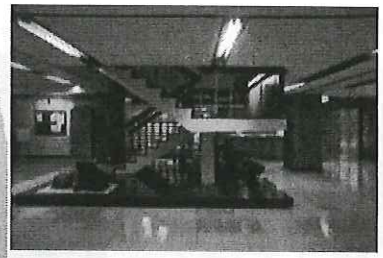


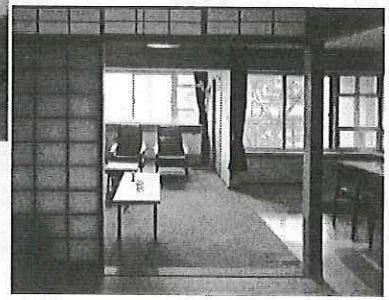
人力でピン並べた…

子孫2人



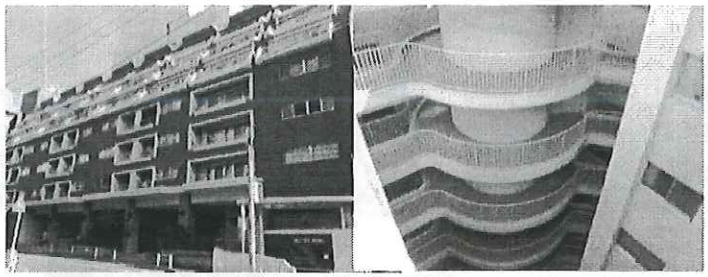
青いタイル・青い外観の街＝青山



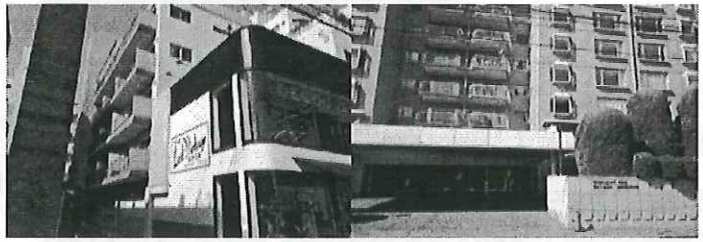


秀和シリーズ第一号
秀和青山レジデンスの誕生（芦原義信設計、1964年）

東大の先生。



シャトー東洋南青山（黒川建設、1971年）

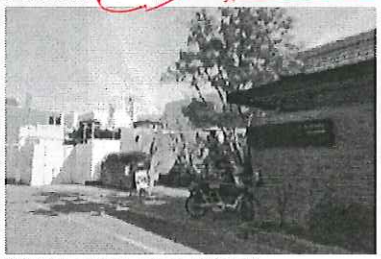


サウス南青山マンション（1970年）　南青山第一マンションズ（1970年、竹中工務店）

社寮のまちとそのリノベーション例

日本鄙政青山社員倶楽部（芦原義信設計、1965年）

ネコ族クラブ
CICADA
レンガ壁



上記のリノベーションしたCICADA（芦原義信設計、2012年,長崎健一改修設計）

青山に点在するアートセンター（ほとんどが私設）

草月アート・センター（現存せず、丹下健三設計、1958年）

岡本太郎記念館、坂倉準三設計アトリエを記念館として開放）

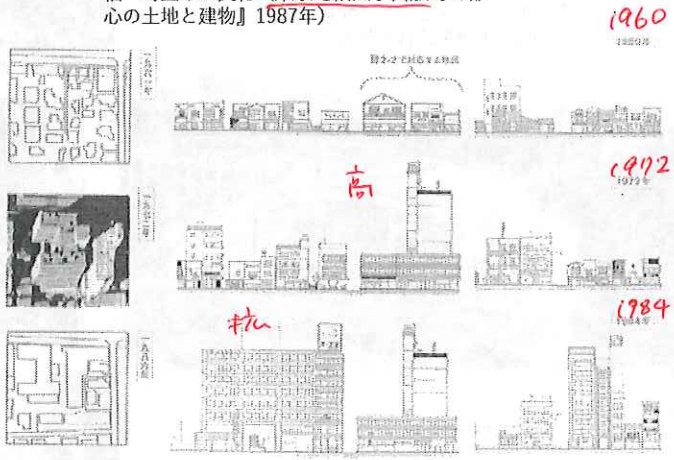
根津美術館（隈研吾設計）

草月アート・センターの活動記録

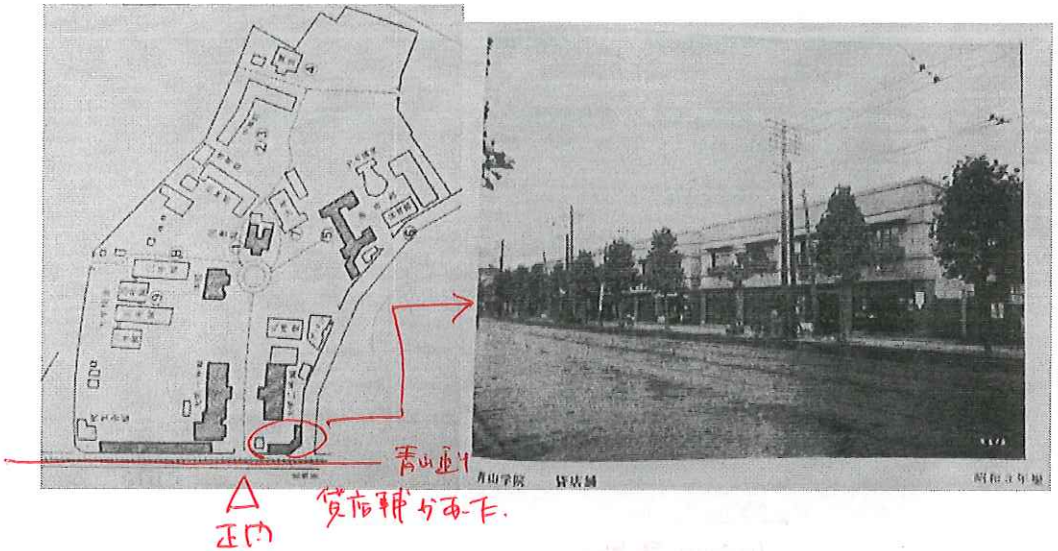
山田守旧自邸（現在、葛喫茶室、定期的な展覧会場）

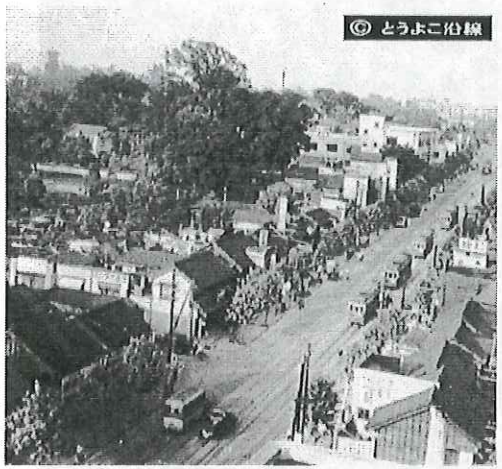
ワタリウム（マリオ・ボッタ）

東京オリンピック（1964年）と青山通りの拡幅　町並みの変化（東京電機大学出版局『都心の土地と建物』1987年）

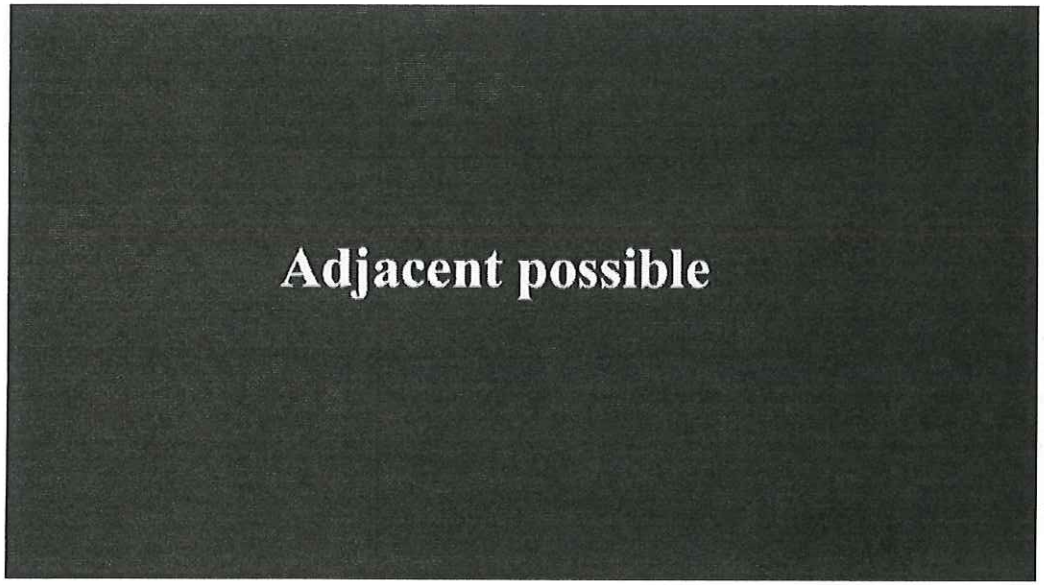


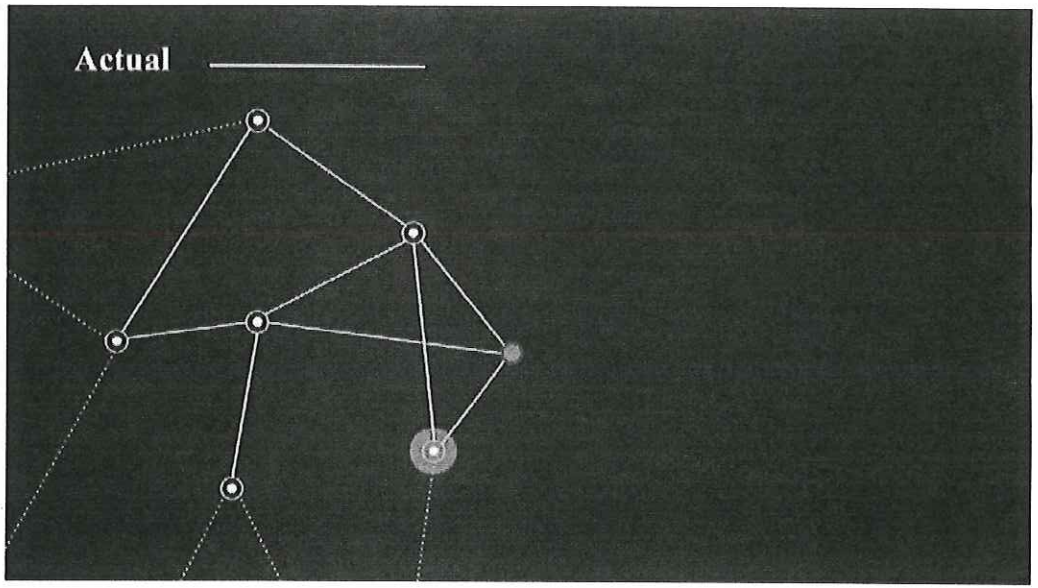
青山通り拡幅前の青山学院大学と貸店舗　22m → 40m



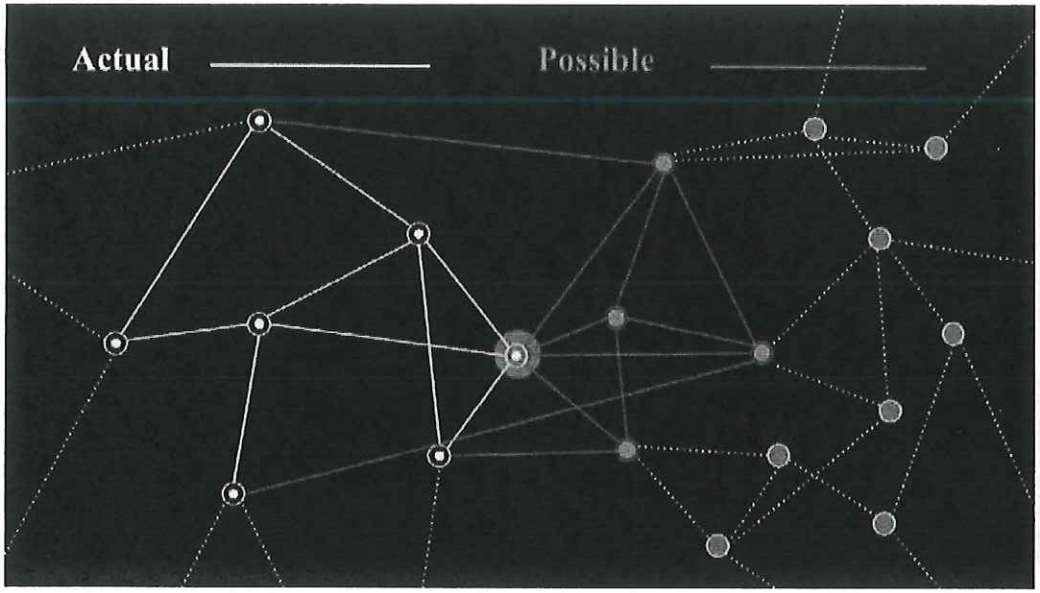


宮益坂の景観（左昭和12年、右昭和26年）



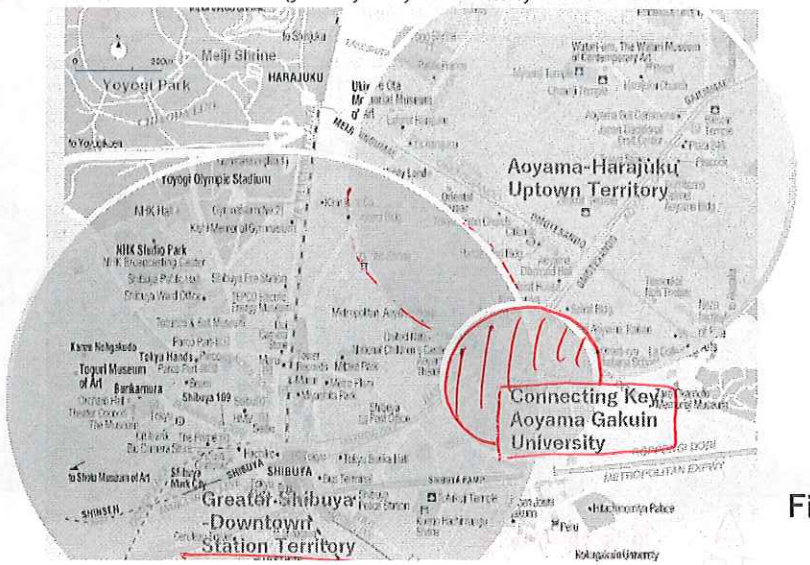


隣接可能領域



点在が発ぴ大していく
政府ではなく 10人がつないで.

Making Shibuya-Aoyama Territory



Greater Shibya

Fin.